

半七捕物帳

少年少女の死

岡本綺堂

青空文庫

「きのうは家のまえで大騒ぎがありましたよ」と、半七老人は云った。

「どうしたんです。何があつたんです」

「なにね、五つばかりの子供が自転車に轢かれたんですよ。この横町の煙草屋の娘で、可愛らしい子でしたつけが、どこかの会社の若い人の乗っている自転車に突きあたって……。いえ、死にやあしませんでしたけれど、顔へ疵をこしらえて……。女の子ですから、あれがひどい引つ吊りにならなければようござんすがね。一体この頃のように下手な素人がむやみに自転車を乗りまわすのは、まったく不用心ですよ」

その頃は自転車の流行り出した始めで、半七老人のいう通り、下手な素人がそこでも此処でも人を轢いたり、塀を突き破つたりした。今かんがえると少しおかしいようであるが、その頃の東京市中では自転車を甚だ危険なものと思めないわけには行かなかつた。わたしも口をあわせて、下手なサイクリストを罵倒すると、老人はやがて又云い出した。

「それでも大人ならば、こつちの不注意ということもありますが、まったく子供は可哀そ

うですよ」

「子供は勿論ですが、大人だつて困りますよ。こつちが避ければ、その避ける方へ向うが廻つて来るんですもの。下手な奴に逢つちやあ敵かないませんよ」

「災難はいくら避けても追つかけて来るんでしようね」と、老人は嘆息するように云つた。
「自転車が怖い何のと云つたところで、一番怖いのはやっぱり人間です。いくら自転車を取締つても、それで災難が根絶やしになるといふわけに行きましますまいよ。昔は自転車なんてものはありませんでしたけれど、それでも飛んでもない災難に逢つた子供が幾らもありましたからね」

これが口切りで、老人は語り出した。

「今の方は御存知ありますまいが、外神田に田原屋という貸席がありました。やはり今こんに日の貸席とおなじように、そこでいろいろの寄り合いをしたり、無尽をしたり、遊芸のおさら濠ちいをしたり、まあそんなことで相当に繁昌している家でした」

元治元年三月の末であつた。その田原屋の二階で藤間ふしまつやっこ光奴ひこという踊りの師匠の大濠あいが催された。光奴はもう四十くらいの師匠盛りで、ここらではなかなか顔が売れている

ので、いい弟子もたくさんに持つていた。ふだんの交際も広いので、義理で顔を出す人たちも多かった。おまけに師匠の運のいいことは、前日まで三日も四日も降りつづいたのに、当日は朝から拭ぬぐつたような快晴になって、田原屋の庭に咲き残っている八重桜はうららかな暮春の日かげに白く光つていた。

浚いは朝の四ツ時（午前十時）から始まったが、自分にも弟子が多く、したがって番組が多いので、とても昼のうちには踊り尽くせまいと思われた。師匠も無論その覚悟でたくさんさんの蠟燭を用意させて置いた。踊り子の親兄弟や見物の人たちで広い二階は押し合うように埋められて、余った人間は縁側までこぼれ出していたが、楽屋の混雑は更におびただしいものであった。楽屋は下座敷の八畳と六畳をぶちぬいて、踊り子全体をとにかくもそこへ割り込ませることにしたのであるが、何をいうにも子供が多いのに、又その世話をする女や子供が大勢詰めかけているので、ここは二階以上の混雑で殆ど足の踏み場もないくらいであった。そこへ衣裳かっらや鬘かっらや小道具のたぐいを持ち込んで来るので、それを踏む、つまづく。泣く者がある。そのなかを駆け廻まわつていろいろの世話を焼く師匠は、気の毒なくらいに忙がしかった。午過ぎには師匠の声はもう噎かれてしまった。

俄か天気あまの三月末の暖気は急にのぼつて、若い踊り子たちの顔を美しく塗った白粉は、

滲み出る汗のしずくで斑まだらになった。その後、見こうけんを勤める師匠の額にも玉の汗がころげている。その混雑のうちに番数もだんだん進んで、夕の七ツ時（午後四時）を少し過ぎた頃に常磐津の「鞆うつぼざる猿」の幕が明くことになった。踊り子はむろん猿曳と女大名と奴やつこと猿との四人である。内弟子のおこよと手伝いに来た女師匠とが手分けをして、早くから四人の顔を拵こしらえてやった。衣裳も着せてしまった。もう鬘まげさえかぶればよいということにして置いて、二人はほつと息をつく間もなく、いよいよこの幕が明くことになった。忙がしい師匠は舞台を一応見まわって、それから楽屋へ降りて来た。

「もし、みんな支度は出来ましたか。舞台の方はいつでもようござんすよ」

「はい。こつちもよろしゅうございます」

おこよは四人を呼んで鬘をかぶせようとすると、そのなかで奴を勤めるおていという子が見えなかった。

「あら、おていちゃんはどうしたんでしよう」

みんなもばらばら起たつておていの姿を見付けに行った。おていは今年九つで、佐久間町の大和屋という質屋の秘蔵娘であった。踊りの筋も悪くないのと、その親許が金持なので、師匠はこんな小さい子供の番組を最初に置かずに、わざわざ深いところへ廻したので

あつた。おていは下膨れの、眼の大きい、まるで人形のような可愛らしい顔の娘で、繻子奴ゆすやつこに扮装いでたつたかれの姿は、ふだんの見馴れているおこよすらも思わずしげしげと見惚みとれるくらいであつた。そのおていちやんが行方不明になつたのである。

勿論、楽屋にはおてい一人でない。姉のおけいという今年十六の娘と、女中のお千代とおきぬと、この三人が付き添つて何かの世話をしていたのである。母のおくまは正月からの煩わづらいで、どつと床に就いているので、きょうの大浚いを見物することの出来ないのをひどく残念がつていた。父の徳兵衛は親類の者四、五人を誘つて来て二階の正面に陣取つていた。姉も女中たちも、さつきからおていのそばに付いていたのであるが、前の幕があいた時にそれを見物するために楽屋を出て、階子はしごのあがり口から首を伸ばしてしばらく覗いていた。その留守の間におていは姿を隠したのであつた。しかし此の三人の女のほかに、楽屋には他の踊り子たちもいた。手つだいや世話焼きの者共も大勢押し合つていた。そのなかでおていは何処へ隠されたのであろう。三人もあわてて二階の見物席を探した。便所をさがした。庭をさがした。徳兵衛もおどろいて楽屋へ駆け降りて来た。

繻子奴の姿が見えなくては幕をあけることが出来ない。そればかりでなく、楽屋で踊り子の姿が突然消えてしまつては大変である。師匠の光奴も顔の色をかえて立ち騒いだ。内

弟子もほかの人達も一度に起つて家^{うち}じゆうを探し始めたが、縺子奴の可愛らしい姿はどこにも見付からなかった。なにをいうにも狭いところで大勢ごたごたしているのと、他の人達はみな自分たちが係り合いの踊り子にばかり気を配^{くば}っていたので、おていがいいつの間はどうしたのか誰も知っている者はなかった。姉と二人の女中とが当然その責任者であるので、かれらは徳兵衛から嘯み付くように叱られた。叱られた三人は泣き顔になって其処らをあさり歩いたが、おていは何処からも出て来なかった。

「どうしたんだろう」と、徳兵衛も思案に能^{あた}わないように溜息をついた。
「ほんとうにどうしたんでしようねえ」と、光奴も泣きそうになった。

もうこうなつては、叱るよりも怒るよりも唯その不思議におどろかされて、徳兵衛もぼんやりしてしまった。いかに九つの子供でも、すでに顔をこしらえて、衣裳を着けてしまつてから、表へふらふら出てゆく筈もあるまい。帳場にいる人達も縺子奴が表へ出るのを見れば、無論に遮り止める筈である。外へも出ず、内にもいないとすれば、おていは消えてなくなつたのである。

「神隠しかな」と、徳兵衛は溜息まじりにつぶやいた。

この時代の人たちは神隠しということを信じていた。実際そんなことでも考えなければ、

この不思議を解釈する術すべがなかった。神か天狗の仕業しわざでなければ、こんな不思議を見せられる道理がない。師匠もしまいには泣き出した。ほかの子供も一緒に泣き出した。この騒ぎが二階にもひろがって、見物席の人達もめいめいの子供を案じて、どやどやと降りて来た。華やかな踊りの楽屋は恐怖と混乱ちまたの巷ちまたとなった。

「きょうのお浚いはあんまり景気が好過ぎたから、こんな悪戯いたづらをされたのかも知れない」と、天狗を恐れるようにささやく者もあつた。

そこへ来合わせたのは半七であつた。彼も師匠から手拭を貰つた義理があるので、幾らかの目録づつみを持つて帳場へ顔を出すと、丁度その騒動のまん中へ飛び込んだのであつた。半七はその話を聞かされ眉を寄せた。

「ふうむ。そりやおかしいな。まあ、なにしろ師匠に逢つてよく訊きいてみよう」

奥へ通ると、かれは光奴と徳兵衛とに左右から取り巻かれた。

「親分さん。どうかして下さいませんか。あたしはほんとうに大和屋の旦那に申し訳ないんですから」と、光奴は泣きながら訴えた。

「さあ、どうも飛んだことになったねえ」

半七も腕をくんで考えていた。彼はおていの可愛らしい娘であることを知っているので、

おそらくこの混雑にまぎれて彼女を引つ攫さらつて行つた者があるに相違ないと鑑定した。神隠しばかりでなく、人攫いということも此の時代には多かつた。半七は先ずこの人攫いに眼をつけたが、そうなると手がかりが余ほどむずかしい。初めからおていを狙つていたものならば格別、万一この混雑にまぎれて衣裳でも何でも手あたり次第に盗み出すつもりで、庭口からひそかに忍び込んだ人間が、偶然そこにいる美しい少女を見つけて、ふとした出来心で彼女を拐かどわか引かして行つたものとする、その探索は面倒である。しかし子供とはいながら、おていはもう九つである以上、なんとか声でも立てそうなものである。声を立てれば其処には大勢の人がいる。声も立てさせずに不意に引つ攫つてゆくというのは、余ほど仕事に馴れた者でなければ出来ない。半七は心あたりの兇状持ちをそれからそれへと数えてみた。

彼はそれから念のために庭へ降りた。庭と云つても二十坪ばかりの細長い地面で、そこには桜や梅などが植えてあつた。垣根きわの際には一本の高い松がひよろひよると立っていた。彼は飛石伝いに庭の隅々を調べてあるいたが、外からはいつて来たらしい足跡は見えなかつた。横手の木戸は内から錠をおろしてあつた。おていを攫つた人間は表からはいつて来た気配はない。どうしても横手の木戸口から庭づたいに忍び込んだらしく思われるのに、

木戸は内から閉めてある。庭にも怪しい足跡の無いのを見ると、彼の鑑定は外れたらしい。半七は石燈籠のそばに突つ立つて再び考えたが、やがて何心なく身をかがめて縁の下を覗いてみると、そこに奴すがたの少女が横たわっていた。

「おい、師匠、大和屋の旦那。ちよいと来てください」と、彼は庭から呼んだ。

呼ばれて縁さきへ出て来た二人は、半七が指さす方をのぞいて、思わずあつと声をあげた。これに驚かされて大勢もあわてて縁先へ出て来た。おていの冷たい亡骸なきがらは縁の下から引き出された。

女や子供たちは一度に泣き出した。

何者がむごたらしくおていを殺して縁の下へ投げ込んだのか。おていの細い喉首のどくびには白い手拭がまき付けてあって、何者にか絞め殺されたことは疑いもなかった。その手拭は今度のお浚いについて師匠の光奴が方々へくばったもので、白地に藤の花を大きく染め出した藍あゐの匂いがまだ新らしかった。

神隠しや人攫いはもう問題ではなくなった。これから舞台へ出ようとすると少女を絞め殺したのは普通の物取りなどでないことも判り切っていた。大和屋一家に怨みをふくんでいる者の復讐か、さもなければこの少女に対する一種の妬みねたか。おそらく二つに一つである

うと半七は解釈した。大和屋は質屋という商売であるだけに、ひとから怨みを受けそうな心あたりはたくさんあるかも知れない。親たちが金にあかして立派な衣裳をきせて、娘をお浚いに出したについて、ほかの子供の親兄弟から妬みをうけて、罪もない少女が禍をうけたのかも知れない。どっちにも相当の理窟が付くので、半七も少し迷った。

なんと云つてもたつた一つの手がかりは、おていの頸にまき付いている白い手拭である。半七はその手拭をほどいて丁寧に打ちかえして調べてみた。

「師匠。これはお前の配り手拭だが、きょうのお客さまは大抵持っているだろうね」

「めいめいというわけにも行きますまいが、ひと組に二、三本ずつは行き渡っているだろうかと思えます」と、光奴は答えた。

「この家の人達にもみんな配つたかえ」

「はあ。女中さん達にもみんな配りました」

「そうか。じゃあ、師匠、すこし頼みてえことがある。まさかに俺が行つて一々調べるわけにも行かぬえから、お前これから二階へ行つて、おまえが手拭を配つた覚えのあるおかみさん達を一巡訊いて来てくれ」

「なにを訊いて来るんです」

「手拭をお持ちですかと云つて……。娘や子供には用はねえ。鉄漿かねをつけている人だけがいいんだ。もし手拭を持つていねえと云う人があつたら、すぐに俺に知らせてくれ」

光奴はすぐに二階へ行つた。

「お話が長くなりますから、ここらで一足飛びに種明かしをしてしましましょう」と、半七老人は云つた。

「師匠はそれから二階へ行つて、見物を一々調べたが、どうも判らないんです。尤も師匠もつとだつて遠慮しながら調べているんだから埒らちは明きません。二階をしらべ、楽屋を調べても、どうも当りが付かないもんですから、今度はわたくしが自分で田原屋の女中を調べることになつたんです。田原屋には四人の女中がおりまして、その女中頭がしらを勤めているのはおはまという女で、三十一二で、丸鬘かみに結つて鉄漿かねをつけていました。これはここうちの親類で、手伝いながら去年から来ていたんです。これを厳しく調べると、とうとう白状しました」

「その女が殺したんですか」と、私は訊いた。

「尤も幽霊のように真つ蒼な顔をして、初めから様子が変だつたのですが、調べられて意

外にもすらすら白状しました。この女は以前両国辺のある町人の大家に奉公しているうちに、その主人の手が付いて、身重みおもになって宿へ下がって、そこで女の子を生んだのです。すると、主人の家には子供がないので、本妻も承知のうえで其の子を引き取るということになったが、おはまは親子の情でどうしても其の子を先方へ渡したくない、どんなに苦勞しても自分の手で育てたいと強情を張るのを、仲に立った人達がいろいろになだめて、子供は主人の方へ引き渡し、自分は相当の手当てを貰って一生の縁切りということに決められてしまつたんです。けれども、おはまはどうしても我が子のことが思い切れないで、それから氣病みのようになって二、三年ぶらぶらしているうちに、主人から貰つた金も大抵遣つてしまつて、まことに詰まらないことになりました。それでも身体は少し丈夫になつたので、それから三、四カ所に奉公しましたが、子供のある家へいくとむやみに其の子をひどい目に逢わせるので一つ所に長くは勤まらず、自分も子供のある家うちは忌いやだといふので、遠縁の親類にあたるこの田原屋へ手伝いに来ていたんです。これだけ申し上げたら大抵お判りでしょう。その日もおていが美しい繻子奴になつたのを見て、ああ可愛らしい子だといつづくみとと見惚みとれているうちに、ちょうど自分の子も同じ年頃だということをおい出すと、なんだか急にむらむらとなつて、おていをそつと庭さきへ呼び出して、不意に絞め殺して

しまったんです。昼間のことではあり、楽屋では大勢の人間がごたごたしていたんですが、どうして気がつかなかったもんですか。いや、誰か一人でも気がつけばこんな騒ぎにならなかったんですが、間違いの出来る時というものは不思議なものですよ」

「で、その手拭の問題はどうしたんです。手拭に何か証拠でもあったんですか」

「手拭には薄い歯のあとが残っていたんです。うすい鉄漿おはぐろの痕あとが……。で、たぶん鉄漿かねをつけている女が袂から手拭を出したときに、ちよいと口に啣くわえたものと鑑定して、おはぐろの女ばかり詮議したわけです。おはまは其の日に鉄漿をつけたばかりで、まだよく乾いていなかったと見えます」

「それから其の女はどうなりました」

「無論に死罪の筈ですが、上かみでも幾分の憐れみがあったとみえて、吟味相済まずというので、二年も三年も牢内につながれていましたが、そのうちにとうとう牢死しました。大和屋も気の毒でしたが、おはまもまったく可哀そうでしたよ」

「全くですな」と、わたしも溜息をついた。「こうなると、自転車や荷馬車ばかり取り締りついても無駄ですな」

「そうですよ。なんと云つても、うわべに見えるものは避けられますが、もう一つ奥にはいつているものはどうにもしようがありません。今お話をしたほかに、まだこんなこともありましたよ」

半七老人は更にこんな話をはじめた。

慶応三年の出来事である。

芝、^{たまち}田町の大工の子が急病で死んだ。大工は町内の裏長屋に住む由五郎という男で、その倅の由松はかぞえ年の六つであつた。由松は七月三日のゆうがたから俄かに顔色が変わつて苦しみ出したので、母のお花はおどろいて町内の医者をもよんで来たが、医者にもその容体が確かには判らなかつた。なにかの物あたりであろうというので、まず^{かた}型のごとき手当てを施したが、由松は手足が^{けいれん}痙攣して、それから^{はん}半^{はんとぎ}晌ばかりの後に息を引き取つた。父の由五郎が仕事場から戻つて来たときには、可愛いひとり息子はもう冷たい^{なきがら}亡骸になつていた。

あまりの驚愕に涙も出ない由五郎は、いきなり女房の横つ面を殴り飛ばした。

「この引き摺り阿魔め。亭主の留守に近所隣りへ鉄棒かなぼうを曳いてあるいていて、大事の子供を玉無しにしてしまやあがつた。さあ、生かして返せ」

由五郎はふだんから人並はずれた子煩悩で、ひと粒種の由松を眼のなかへ入れたいほどに可愛がつていた。その可愛い子が留守の間に頓死同様に死んだのであるから、気の早い職人の彼は、一途いちずにそれを女房の不注意と決めてしまつて、半氣違はんきちがいのようなありさまで彼女に食つてかかつたのも無理はなかつた。

「さあ、亭主の留守に子供を殺して、どうして云い訳をするんだ。はつきりと返事をしろ」
彼はそこに居あわせた人達が止めるのも肯きかずに、又もや女房をつづけ打ちにした。さなきだに可愛い子の命を不意に奪われて、これも半狂乱のようになってる女房は、亭主に激しく責められて、いよいよ赫かつと逆上さかしたらしい。彼女は蒼あざめた顔にふりかかる散らし髪をかきあげながら、亭主の前へ手をついた。

「まことに申し訳ありません。きつとお詫わびをいたします」

切り口上にこう云つたかと思うと、かれは跣足はだしで表へとび出した。その血相けっそうが唯ならないと見て、居あわせた人達もあとから追つて出たが、もう遅かつた。大通りの向うは高た

輪かなわの海である。あれあれといううちに、女房のうしろ姿は岸から消えてしまった。

由五郎は今さら自分の氣早を悔んだが、これも遅かった。やがて引き揚げられた女房の死体は、わが子の死体と枕をならべて、狭い六畳に横たえられた。妻と子を一度にうしなつた由五郎は、自分も魂のない人のように唯黙つて坐つていた。相長屋の八、九人があつまつて来て、残暑のまだ強い七月の夜に二つの新らしい仏を守つていた。

その通夜つやの席で、一軒置いた隣りの紙屑屋の女房がこんなことを云い出した。この女房は四、五日まえに七つになる男の児うしなを亡つたのであつた。

「ほんとうに判らないもんだわねえ。うちの子供なくなが歿なりました時には、ここのおかみさんが来て、いろいろお世話をして下さつたのに、そのおかみさんが幾日も経たないうちにこんなことになつてしまつて……。おまけに由ちやんまで……。まあ、なんということでしょう。家の子供うちも由ちやんと丁度おなじように、だしぬけに顔の色が變つて、それからいいつしきつしきの間の間も無しに死んでしまつたんですが、お医者にもやつぱりその病氣がたしかに判らないということでした。この頃は子供にこんな悪い病氣が流行はやるんでしょうか。まつたく忌いやですね。いや、それに就いて、わたしは何だか忌な心持のすることがあるんですよ。実はね、家の子供が玩具おもちゃにしていた水出しをね、今考えると、ほんとうに止せばよかつた

んですけれど、ここの家の由ちゃんに上げたんですよ。死んだ子供の物なんかを上げるのは悪いと思っただんですけれど、ここの由ちゃんがけき遊びに来て、おばさん、あの水出しをどうしたと云うから、家にありますよと云つて出して見せると、わたしにいけないかと云つて持つて帰つたんです。そうすると、その由ちゃんが又こんなことになって……。死んだ子供の物なんか決して人にやるものじゃありませんね。わたしは何だか悪いことをしたような心持がして、気が咎めてならないんですよ」

紙屑屋の女房はしきりに自分の不注意を悔んでいるらしかった。不運な母と子の死体はあくる日の夕方、品川の或る寺へ送られて無事に葬式とむらいをすませた。由五郎は自棄酒やけを飲んでその後は仕事にも出なかつた。

「この話がふとわたくしの耳にはいったもんですからね。いわゆる地獄耳で聞き逃がすわけには行きません」と、半七老人は云つた。「その大工の子供や、紙屑屋の子供が、はやり病いで死んだのなら仕方ありません。門かどなみ並に葬礼かどなみが出て不思議がないんですが、そこに少し気になることがあつたもんですから、八丁堀の旦那方に申し上げて、手をつけてみることにしました」

「じゃあ、二人の子供はやっぱり何かの災難だったんですね」と、わたしは訊いた。
「そうですよ。まったく可哀そうなことでした」

それから四、五日の後に、由五郎は勿論、紙屑屋の亭主五兵衛とその女房お作とが家主付き添いで、月番の南町奉行所へ呼び出された。死んだ由松が紙屑屋の女房から貰つて来たという玩具の水出しが、証拠品として彼等のまえに置かれた。今日ではめつたに見られないが、その頃には子供が夏場の玩具として、水鉄砲や水出しが最も喜ばれたものであつた。水出しは煙管の羅宇のような竹を管として、それを屈折させるために、二箇所又は三箇所に四角の木を取り付けてある。そうして一方の端を手桶とか手水鉢とかいうものに挿し込んで置くと、水は管を伝つて一方の末端から噴き出すのである。しかしただ噴き出すのでは面白くないので、そこには陶器の蛙せとが取り付けてあつて、その蛙の口から水を噴くようになってゐる。巧みに出来てゐるのは、蛙の口から可なりに高く噴きあげるので、子供たちはみな喜んでこの水出しをもてあそんだのである。その水出しが奉行所の白洲へ持ち出されて嚴重な吟味の種になろうとは何人も思い設けぬことであつた。

紙屑屋の夫婦は先ずその水出しの出所を糺された。その玩具はどこで買ったかという訊

問に対して、亭主の五兵衛は恐る恐る申し立てた。

「実はこの水出しは買いましたものではございません。よそから貰いましたのでございます」
 「どこで貰った。正直に云え」と、吟味方の与力はかさねて訊いた。

「芝、露月町ろうげつちやうの山城屋から貰いました」

山城屋というのは其処でも有名の刀屋である。先月の末に、五兵衛がいつもの通り商売に出で、山城屋の裏口へゆくと、かねて顔を識しっている女中が紙屑を売ってくれた末に、おまえの家の子供にこれを持って行ってやらないかと云つて、かの蛙の水出しをくれた。五兵衛はよろこんで貰つて帰つて、それを自分の子供の玩具にさせると、二日ばかりで其の子は急病で死んだ。それが更に大工の子供の手に渡つて、その子はその日におなじく急病で死んだのであつた。

それらの事情が判明して、引合いの者一同はひと先ず自宅へ戻された。しかし水出しのことは決して口外してはならぬと堅く申し渡された。その後十日とおかばかりは何事もなかつたが、盂蘭盆うらぼんが過ぎると、山城屋の女房お菊と、女中のお咲が奉行所へ呼び出された。この二人は再び帰宅を許されないので、世間ではいろいろの噂をしていると、九月の中頃にその裁判が落着らくちやくして、女中のお咲は遠島、女房のお菊は死罪という恐ろしい申し渡しを

受けたので、当の山城屋は勿論、世間ではびっくりした。

したがって、それに就いていろいろの風説が伝えられたが、その真相はこうであった。

お菊は後妻で、ことし八つになる惣領息子をふだんから邪魔物にしていた。世間によくある習いで、彼女はおそろしい継母ままはは根性からその惣領息子を亡きものにしてしようとたくらんで、子供の玩具として蛙の水出しを買って来た。水出しの一端を水の中へ挿し込んで置いて、なかなか自然に水をふき出すものではない。俗に吸い出しをかけると云って、最初に一方の蛙の口へ人間の口をあてて水を吸い出してやらなければならない。一度そうすると、それからは自然に水を噴き出すようになる。それであるから、この水出しをもてあそぶものは必ず一度は自分の口で蛙の口を吸わなければならない。水の出ようの悪いときには、二度も三度も蛙の口を吸うことがある。これまで説明すれば、もう委しくくわ云う必要はあるまい。お菊は陶器の蛙に一種の毒薬を塗りつけて置いたのであった。

しかし彼女はそれを継子ままこに与えようとしてさすがに躊躇ちゆうちよした。彼女はその陰謀のおそろしいのおびやかされて、結局それを中止することにしたが、さてその水出しの処分に困って、女中のお咲に命じて芝浦の海へそつと捨てて来いと云った。勿論、お咲がそのまま海へ投げ込んでしまえば何事もなかったのであるが、その秘密を知らない彼女はわざ

わざ捨てにゆくのも面倒だと思つて、それを恰あたかも来あわせた紙屑屋の五兵衛にやったので、その蛙の口を吸つた五兵衛の子供が先ず死んだ。つづいて由五郎の子供が死んだ。一つの水出しが二人の子供を殺すような惨事が出しゅったい来した。

たとい半途で中止したとしても、継子を毒殺しようとしてただけでもお菊は何等かの罪を受けなければならなかつた。殊にそれがために、紙屑屋の子を殺し、大工の子を殺し、あわせてその母を殺すような事件を仕出しでかしたのであるから、その時代の法として普通の死罪はむしろ軽いくらいであつた。お咲はなんにも知らないとはいへ、主命にそむいて其の水出しを他人ひとにやった為に、こういう結果を生み出したのであるから、これも重い刑罪を免かれることは出来なかつた。

奉行所の記録に残っているのは、ただこれだけの事実であつて、お菊がどこからこんな恐ろしい毒薬を手に入れたかをしるしていない。お菊がそれを白状したらば、その毒薬をあたえた者は当然処刑を受くべき筈であるが、申渡書には単にお菊とお咲をしるしてあるばかりで、ほかの関係者のことはなんにも見えない。したがつて、単に毒薬というばかりで、その薬の種類などは今から想像することは出来ない。

「いや、実はその毒薬をやった医者も判っているんですがね」と、半七老人はここで註を入れた。

「そいつはなかなか素捷すばやい奴で、山城屋の女房と女中が奉行所へ呼ばれたと聞くと、すぐに夜逃げをして、どこへ行ったか判らなくなっただんです。そのうち例の瓦解がかいで、江戸も東京となつてしまいましたから、詮議もそれぎりで消えました。運のいい奴ですね」

「そうすると、その水出しのことはあなたの種出しなんですね」

「お通夜の晩に、紙屑屋の女房がふと水出しのことをしゃべったのが手がかりで、こんな大事件をほじくり出してしまいました。いつかあなたに『筆屋の娘』のお話をしたことがあります。あれはこの翌月のことで、世間に似たようなことは幾らもあるもんです」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

入力：網迫

校正：藤田禎宏

2000年9月7日公開

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

少年少女の死

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>